

喜多野清一先生追悼文

安藤喜久雄

私が喜多野先生の馨咳に接するようになったのは先生が昭和46年4月、本校に赴任されて以来のことである。本校大学院の社会学専攻に修士課程が早くから創設されていたにもかかわらず博士課程がなかったため、博士課程を創設するためにお招きしたわけである。

昭和46年にお越しいただき、昭和52年に博士課程が認可されたが、その間丸々6年間かかったことになる。喜多野先生がご高令になるにもかかわらず、学内事情で延び延びになり、私自身冷や冷やしどおしであった。それにもかかわらず、喜多野先生はご自分の使命を果すため最後までご努力されたことに感謝せずにはられない。博士課程が文部省から認可されたとき喜多野先生は満76歳を過ぎておられたのである。

喜多野先生が本校に赴任された当時、大学院修士課程においてもカリキュラムや学生指導体制が不備であったため、その整備、充実に力を注がれた。修士課程の整備、充実が博士課程の基礎づくりでもあった。喜多野先生は几帳面だけでなく、何事も用意周到に運ぶように心掛けておられた。たまたま私が先生の着任当初、学科主任のお手伝いをしたり、その後学科主任をしたこともあって先生のお手伝いをする事になり、頻繁にお付き合いするようになった。大学内だけでなく喫茶店、レストランは言うに及ばず、急を要するときはご自宅に伺うことも少なくなかった。ご自宅に伺うと、たまにワインをご馳走になることがあった。先生がワインを愛飲されていることを知ったが、その後私自身もワインを嗜むようになったのも先生の影響かもしれないと密かに思っている。先生の人柄の一端については私自身「ソキエタス」などにも書いたもので、ここでは主として先生と同世代の先生との駒沢でのお付き合いを中心に紹介してみたい。

喜多野先生が東大の学生時代、建部先生の授業に古坂明詮先生が当時助手として建部先生のカバンを持って教場に来られ、授業が終るまで教卓の真前で坐っておられたという。そして授業が終ると建部先生のカバンを持ってお帰りになるという話をされたのを思い出す。喜多野先生が東大入学して間もなく建部先生は東大を辞任された。古坂先生は米国に留学され、帰国後大正末期より本校で教鞭をとられていた。第二次大戦後学監などもおやりになり昭和45年3月に定年退職されたが、そのあとに喜多野先生が赴任されたわけであるから、これも何かの因縁ではないかと思う。

在職当時、古野清人先生が当初非常勤でお出になっており、後に専任となられたが、当時在職中の心理学の秋重先生を含めて3先生は九大時代共に教鞭をとっておられた仲であった。とりわけ古野先生とは第2次大戦前からの古くから親しい間柄で、お互いに名前を呼び捨てにしていたのを今でも懐しく思い出す。残念なことに3人の先生とも今この世には居ない。また非常勤として来られていた新聞学の小山栄三先生（昭和58年8月死去）とも東大時代からの友達で研究室で歓談しておられた。やはり非常勤講師として来られていた黒川純一先生とは東大の先輩、後輩であるばかりでなく、日本社会学会で同時期に両先生が常務理事を務められた関係で親しくなられ、研究室でお会いされるとよくお話をされていた。このように東大でほぼ同時代に学ばれた先生方が本学大学院に多く関係されていたこともあって、お会いすると昔話に花が咲き、私も同席して拝聴したことを昨日のように思い出す。それは日本社会学の歴史の一コマを見るような気がしたといっても過言ではないだろう。

先生は社会学を基礎に据えながら、専門分野に関係する人類学、経済学、歴史学など幅広い学問分野に御造詣が深かったが、それだけに本学に関係しておられた諸先生ともいろいろなルートを通じての知己がおられた。先生の御活躍の広さと人柄を知る上でもいろいろな方より先生のお話を聞く機会があったことを記しておきたい。

喜多野先生について思い出の一端を記した次第である。先生の御冥福をお祈り致します。